

2004. 1. 1

月刊通信

はなしがい

第210号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

「今の子どもには常識がない」と言う人がいました。よく話を聞いてみると、その人の「常識」とは、わざわざ説明しなくても行動できることとか、オトナに逆らわずに従う態度というようなことでした。たしかに、子どもたちに何か話そうとしたり、何かさせようとしても、話が通じないことがあります。わたしも専門学校の学生たちにしぼしば感じるので、話しの意味やするべきことの理由を必ず話すようにしています。しかし、人間同士そう簡単には理解できないのが本当かも知れません。

●対話の時代と「現実主義」

七十年ほど前、日本は「問答無用」という言葉に象徴されるような国でした。昭和の初め、戦争に突入する直前の時代です。しかし、それは常識が通じたというわけではなく、大ぜいの人びとがだれかに支配されて自らも服従していた時代です。近ごろは「対話の時代」とか「国際化」などといわれ、「問答無用」は通用しなくなりました。対話が必要です。対話とは、モノ・コトへの疑問を提起して、それに

答えることです。人との対話の経験があればこそ、人はひとりで考えて判断する能力を持てるのです。

ところが、日本の政治の世界では、アメリカが活発に戦争を始めてから、話し合いや議論の機会が少なくなっています。今、日本の最大の問題は、イラクへの自衛隊派遣の問題です。すでに航空自衛隊の輸送部隊が送られました。そして、陸上自衛隊がいつ派遣されるのかという方向に進んでいます。いづれどおりの政府のやりかたです。

いったん事が始まったら、もう行くか行かないなどの議論もなく事態はどんどん進行します。そのたびに世論も少しずつ変化して政府の政策を認めるようになっていきます。そこにあるのは「現実主義」です。始まってしまったことを前提にして、次にどうするのかという対処法ばかり考えるのです。しかし、もしも悪い方向へ進んでいるとしたら取りかえしのつかないことになります。

前号で紹介した政治批評家のダグラス・ラミスが、『なぜアメリカはこんなに戦争をするのか』（2003/10晶文社）につづいて、『日本は、本当に平和憲法

を捨てるのですか』(2003/11平凡社)という小さな絵本を出しました。そこに日本国憲法を否定する「現実主義」への批判が書かれています。「現実」といえばふつうは目の前の事実をいいます。しかし、ラミスは「現実とは歴史の記録です」と明確にいつて、「二〇世紀は安全でしたか？」と問いかけます。そして、国家が武装している時代にこそ、もっとも多くの人が殺されたという事実を示しています。

●若者と歴史の知識

わたしがラミスに感心するのは、問題を根本から考える考え方です。『なぜアメリカはこんなに戦争をするのか』について、著者自ら「スローブック」と呼んで「一日一文くらいのゆっくりしたペースで読むのでもいい」と書いています。わたしは一カ月かけて読み終えました。その中の「暗い時代のための教育法」には現代の対話へのヒントがあります。

ラミスはまず、一九六〇年代にソ連の若者たちが自国で行われている核実験を知らなかったというエピソードを紹介しています。それは人ごとではあり

ません。今の日本で、わたしたちは自由にモノ・コトについて考えて判断しているでしょうか。ラミスは、日本の思想状況をこう言います。

「今日の日本には、当時六〇年代にソ連にあったような思想統制は存在しない。しかし、どうやら似たような状態になろうとしている。」

ラミスが気にかけるのは、日本の若者たちが自分の国やその歴史に関して、外国で常識になっていることを知らないということです。たとえば、天皇ヒロヒトの戦争責任について外国では有罪が常識なのに日本ではさほど問題になりません。わたしも学生に確かめたことがあります。第二次大戦の日独伊三国の戦争責任者として、ヒトラー、ムッソリーニの名はあがっても、天皇の名はすぐには上がりませんでした。

若者たちに歴史の知識が欠けているところに入り込んだのが、「自虐史観」に反対するという「新しい歴史教科書をつくる会」でした。歴史の事実を無視して、「南京大虐殺は中国の宣伝家のデッチ上げだ」とか、「日本の中国、東南アジアの侵略はそれ

らの西洋植民地主義からの解放を助けた」とか主張します。生徒たちが自分自身や自国について気分を悪くしないようにするべきだということです。

そんな若者たちに向かうべき「教師の務め」をラミスは述べています。少し書きかえて引用します。

- ・若者たちが絶望に陥ることなく、この本当の話に直面できるほど強くなるように教えること。
- ・教師の技術は、単なる情報の運び手となることではなく、希望や情熱や活動を育てることにある。
- ・教師は本当の話と若者との間に立ち、自らの行為で手本を示しながら、いかにして絶望や冷笑主義に陥ることなく真実に耐えるかを教えること。

これらは「教師」ばかりでなく、オトナたちの務めでもあるといえます。

●歴史と現実の教育

ラミスはまた歴史の教科書が真実でない場合の教育方法も取り上げます。まちがった常識に対して、オトナたちがどんな態度をとるべきかという問題になります。目標は教科書の価値の「相対化」です。

教科書にも歴史があるということの教育です。たとえば「日本では教科書、特に歴史教科書の中身は政治的争点になっていること」を教え、「著者のこの教科書を書いた目的は何なのか」「事実よりも何か政治的な目的の方を重視しているか」と考えるのです。そして、生徒たち自身に「自分がいるのはどういう状況なのか」を考えさせることです。

この教育は、今の日本の問題についての考えにも応用できます。たとえば、イラクへの自衛隊の派遣について「人道支援」という言葉が繰り返し使われました。美しい言葉です。しかし、軍服姿の自衛隊が武器を持ってイラクで行動することが「人道支援」でしょうか。その目的は何でしょうか。自衛隊はイラクの人たちの望む水道や電気の工事をするわけはありません。

今は若者たちに世間の「常識」を押しつけても仕方ありません。教師やオトナも若者とともに対話によって「常識」の背後に何があるか考えましょう。対話によって時代を切り開く希望や情熱が発見できることでしょう。

2004. 2. 1

月刊通信

はなしがい

第211号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

先日、説経節の「小栗判官」をひとり芝居にした舞台を見ました。中西和久という人が二時間近く語り歌い踊るものです。語りは大衆演劇、歌は義太夫のようでした。すじの運びばかり目立つ展開で正直なところおもしろくはありませんでした。かつてレコードで聞いた説経節はもっと格調の高いものでした。説教節とは仏教の説話を物語として語り伝えたものです。そこには、コトバの力を生かしたさまざまな技術があつたはずで、声のコトバで語られた物語とはどのようなものだったのでしょうか。

わたしは『説経節―山椒大夫・小栗判官他』（平凡社。東洋文庫）荒木繁・山本吉左右編注）を取りだして、解説の「説経節の語りと構造（山本吉左右）」を読みました。そこには「語り」を構成する「決まり文句」のことが書かれていました。それは物語を口頭で伝承するための一つの工夫でした。

今日、政治の場で語られるコトバの多くは「決まり文句」です。コトバだけのコトバで、現実の状況とは関係なく使われます。とくにひどいのは、小泉首相の答弁です。自衛隊のイラク派遣問題では何度

も「自衛隊は戦争に行くのではなく人道支援に行くのだ」と繰り返されました。そして、とうとう自衛隊が派遣されました。以前には「自衛隊は自衛隊であつて軍隊ではない」と言われたのに、今では海外にまで出かけるようになったのです。

コトバは使いようによって生きた力を持ちます。もしもコトバが形ばかりのものであるなら、決して人の心を動かしたり人を行動に導くことはできないでしょう。コトバの力は今の社会と教育とに求められています。社会を正しく知って、コトバの教育をするために、コトバの根本的なはたらきを考えなおしてみましよう。

●「話し」とコトバのはたらき

今、教育の世界では、コトバの力の低下が問題にされるとともに、「話し・聞き」の能力を高めることが重視されています。そもそも「話し」はどうやって成り立つのでしょうか。説教節の「語り」の技術には、わたしたちがコトバを使ってモノ・コトについて考えるためのヒントがあります。

第一に、話したいコトが必要です。それは頭の中に、ぼんやり浮かぶもので、最初からはっきりした形があるわけではありません。モヤモヤした気分やぼくぜんとしたイメージです。第二に、声に表現する能力が必要です。コトバはそもそも声なのです。「話し」は声のコトバです。話したいコトを声のコトバに形づくることです。それを文字にしたら文章になります。

「話し」は一音一音の声ではありません。声はまず単語となって発せられます。話したいコトが、単語として発音されれば、意味を持ったコトバになります。「えー」とか「あー」で止まってしまうのは、話したいことが単語にならないときです。

単語はただ並べられるものではありません。文の形にまとめられて意味を持つのです。文には組み立ての決まりがあります。それが文法です。文法は同じコトバを使う者同士の共通のルールです。わたしたちは意識するしなにかかわらず文法の決まりにしたがって話したり書いています。いわば、わたしたちのコトバはいろいろな決まりでがんじがらめで

す。しかし、それは不自由なことではありません。決まりにしたがうことで、ほかの人たちにもわかる考えになるのです。

●説教節の「決まり文句」

説教節の「決まり文句」は文を構成するものです。山本氏は『信徳丸』という作品の次の一節から「語り」における「決まり文句」を説明しています。

「乙姫この由聞こしめし、御供申さぬものならば、なにしにこれまで参るべしと、信徳取つて肩に掛け、町屋に出でさせたまえば、町屋の人は御覧じて、これをあわれと、みな感ぜぬ者はなし」

(仮訳) 乙姫はこれをお聞きになって「お供をしないなら、ここまでできた意味がない」と信徳を背負い、町に出ると、人びとはみなあわれと感じたのである)

山本氏によると、説教節の文章の約半数が決まり文句です。「□取つて肩に掛け」というのが「決まり文句」です。ほかに、冒頭の「□この由聞こしめし」、あとの「□これをご覧じて」もそうです。「□」に登場人物の名前を入れることで、即興的

に物語を語ることができるのです。

近ごろ「朗読」が盛んですが、「語り」というものもあります。物語などを暗記して声に表現するのですが、これは本来の語りではありません。本来は説教節のように即興的にコトバを組み立てながら物語を語ることなのです。そもそもコトバは音声でした。それを記録する文字はずいぶん後になって発明されました。文字でコトバが記録できるようになってから、複雑な物語が構成できるようになりました。

それに対して、声のコトバでは長い物語を暗記するのは不可能ですから、大まかなすじだけ記憶していて、「決まり文句」で部分部分を組み立てたのです。そうして、口頭伝承の物語は何百年も生き延びることができました。しかし、それは「決まり文句」の単なる繰り返しではなかったのです。今から一〇〇年ほど前に、説教節は文字のコトバの発展とともに滅んでしまいましたが、声のコトバの必要性がなくなつたわけではありません。

山本氏は文字に記録されて音声を失ってしまった説教節を研究するために、ゴゼ歌やイタコの語りを

手がかりにしました。そうして、とらえた説教節の本質は次のようなものです。

「説教節は棒暗記されたテキストの単なる再演ではなく、正本として文字に書きとめられる以前には、音声を伴つた生きた言語現象であり、文字を用いないで口から耳へと伝承され、演奏の際には、聴衆を前にしてその都度その都度その場で新しく、しかも急速に物語が構成されるものであったということである。」

声のコトバの持つ力はここにあります。いわば、わたしたちの使うコトバのすべてが「決まり文句」です。これまで日本人が作り上げてきたものの伝承です。しかし、一人ひとりの人にとっては、自らの考えや思いを表現する手段となります。たとえコトバの表現が不十分であっても、その背後には時代と社会と人間関係がうかがえるのです。そのコトバはもう「決まり文句」ではありません。一人ひとりの「生きたコトバ」です。人間と社会を生き生きとさせて、よりよい方向に進める力を持つコトバなのです。

2004. 3. 1

月刊通信

はなしがい

第212号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

自分がいま生きている現代は、なかなか歴史としてとらえられません。しかし、一九九五年の地下鉄サリン事件に代表されるオウム真理教の一連の事件は、まちがいに歴史に残ります。二月二十七日に、教祖・麻原彰晃に死刑判決が下りました。しかし、それで問題が解決したわけではありません。

麻原の配下の者たちは、裁判のなかで事件について語りましたが、麻原自身は沈黙のまま判決の日を迎えました。しかし、犯人たちによって語られたオウムの世界は、一般の人たちの納得いくようなものではありませんでした。世間の人たちは、事件の最初からおどろかされました。犯罪者となった幹部たちの中には、有名大学の出身者で物理学や医学の知識あるエリートたちが大ぜいいたからです。あんな人たちが、いったいどういうわけでオウムの世界に入っている、あんな犯罪を犯したのか。今でも、そのわけが分からないという人は大ぜいいるでしょう。

わたしもその一人です。それでも、自分の若き日の経験振り返ると、自分があのような考えや行動とまったく無縁だとは言いきれません。また、この

三十年間、教育に携わってきた者として、日本の教育との関係も考えざるを得ませんでした。

今回の麻原の死刑判決は、法律の手続きとして一応の解決をみるものですが、わたしはすっきりしない気持ちでした。ところが、ある一冊の本を読んだことで、オウム事件で問題にするべきテーマを発見者した思いがしました。

●一九八〇年代の精神史

わたしが読んだのは、五、六年のあいだ関心を持って追いつけている大塚英志の書いた『「おたく」の精神史—一九八〇年代精神史』（2004.2.20講談社現代新書）です。本文四三二ページ、普通の新書二冊分の厚みがあります。その中でオウム事件について書かれたのは、「24章オウム真理教を論じるためのメモ」です。わずか十四ページですが、ハッとさせられる内容でした。

わたしは大塚氏の本にはいつも不思議な感動を覚えます。どこかに必ず全力投球で書かれた部分があります。わたしは以前から、大塚氏の自伝的なモチー

フが見える部分に魅力を感じてきました。今回の本ではさらに明確なモチーフが感じられました。大塚氏は一九五八年の生まれです。自らを「戦後民主主義」の時代に育ったものと規定し、また、ひとりの「おたく」であるとも称しています。その二つの規定から、戦後史における自己の位置を探ろうとしているのです。

たまたま編集の仕事で関わってきたマンガの世界、しかも少女マンガを題材にするので「おたく」と呼ばれて一般の評価は高くありません。わたしは大塚氏のとりあげる世界は知りませんが、日本の歴史や社会についての射た思想に感心します。その土台には学生時代の民俗学の研究があります。とくに、最近のアニメ映画『エヴァンゲリオン』を分析した一連の論文はすばらしいものです。

今回の本にも「私小説」と言えるような自己探求の記述が見られました。サブカルチャー的な小説創作法で見せる文学論とはちがったものです。大塚氏の創作論には、マンガ雑誌の編集者として身につけた「売れる本を作る」という態度が見えます。わた

後の教育の基本課題もとらえることができます。

第一は、コトバの回復の課題です。コトバと現実との関わりを見直しです。リアルなコトバがリアルな現実をとらえます。大塚氏は「彼らによつて失効されてしまった言葉をいかに再生させるか」と言います。

そして、大塚氏は「オウムのマスコミ批判も、人権や信教の自由も彼らから語られない限りにおいては正しい」と記したことを自ら批評して、「それは彼らの自己弁護の詭弁として借用されてしまう程に、それらの言葉や思想を使うべくたちの側が未熟であったからではないか。」と問いかけます。

大塚氏は、抽象化されて死んだ言葉が現代に流れている現実を突いているのです。

第二は、オウムが越えてしまった「一線」の問題です。人間のモラルの探求です。大塚氏は、「彼らが何故、一線を越えてしまったのだろう」と問いかけ、オウムの問題は「コミケあたりのおたくのサークルが勢いでサリンを製造して散布してしまったごとき点」にあると言います。

しは「商売人」の大塚氏よりも、モチーフに忠実な「作家」としての大塚氏の方が好ましく見えます。

それこそ本来の文学の営みだと思えます。

もう一つ今回で分かったことがあります。大塚氏の創造する「物語」の役割です。大塚氏は文学をカタルシスと考えています。文学が現実を反映する面よりも、虚構としての記号の面を強調します。そして、「物語」では、虚構の世界でのカタルシス——代理経験による心の浄化を目ざします。つまり、殺人や犯罪などを「物語」の世界で「体験」することで、現実生活の危機から逃れられるというのです。これは、志賀直哉の創作論や平野謙の作家論にも通じる伝統的な文学の考えかたです。

●オウム事件の三つの教訓

さて、大塚氏の紹介でだいぶ遠回りをしましたが、オウム事件を論じるための三つのポイントを紹介しましょう。それは、日本の歴史においてオウム事件をどのようにとらえ、今後の日本社会をどのようにしたらいいのか、探求の指針となります。また、今

「まさかそこまでではないであろう」という「世間の暗黙の了解」が、なぜ越えられたのか。これらの問いを大塚氏は自ら「おたく」と称する自身に向けます。犯人の口から「それは……からだ」という理由づけされることもありませんが、そんなものは「ダイベートのなロジック」にすぎないと言いきります。そして、大塚氏は訴えます。「瑣末なロジックで「一線」を越えてしまいうるその感覚と、それを許容する言語空間に、私たちはあまりに鈍感になっていないか」と。

第三は、オウムの歴史的な位置づけです。それは大塚氏自身を歴史的に位置づけることにつながります。その課題は今後も続けられます。

「ぼくたちの年代はオウムという樹の一本一本、あるいは葉の一枚一枚が余りにくつきりと見えてしまうため、森としてのオウムを言語化できないできた。」

大塚氏の一連の仕事は、わたしにも、現代社会の歴史を考えさせ、そこに生きる自身の位置を考えさせてくれるものです。

先日、読売新聞の取材を受けました。四月から連載の始まる「日本語の現場」に関してのことです。きっかけはわたしがインターネットに公開している「はなしがい通信」188号の記事でした。郵便局で見かけたことを専門学校で話題にした内容です。たいていの人が呼ばれても、「はい」と返事をしないで近づいていくのはおかしいと言っても、学生たちは返事をしないのが普通だというのでした。記者は「通信」をプリントして、現代社会のコミュニケーションのあり方について聞きにきたのです。わたしが問題にしたのは、呼ばれた方よりも呼びかける方のコミュニケーションの意志と努力でした。町に出ればあちこちの店から「いらっしやいませ」「こんにちは」と儀礼的な声が響いてきます。駅やデパートなどのアナウンスは、だれにともなく呼びかけています。「テレビにお守りをさせないで」という標語を聞いたことがあります。テレビも個人には呼びかけません。呼びかける側は、相手の反応を期待せずにアライバイの声かけをしているようです。

● コミュニケーションと対話
コミュニケーションの基本は一人対一人の対話です。対話の芸というと漫才ですが、近ごろのお笑いのコングには対話が成り立っていません。爆笑問題が一つの典型です。ボケがおかしなことを言うと、ツツコミが脇から批評的なコメントを入れるだけで、正面切った対話はしません。

演劇の基本も一人対一人の対話です。各場面は二人の対話で成り立っています。シェイクスピアの魅力の一つは対話のおもしろさです。日本の落語はシェイクスピアに匹敵します。熊さんと八つあん、亭主と女房、与太郎とおじさん、店子と大家、主人と番頭、町人と武士といったさまざまな対話があります。現代でも通用する人びとの対話の典型です。

ところが、現代社会の対話は量においても質においても貧しくなっています。コトバによるコミュニケーションとして対話を問題にしても、敬語をどう使うかというわべの技術にまとめられがちです。しかし、対話には、人と人との関わりを表現するものとしてさまざまな問題があるのです。

2004. 4. 1
月刊通信
はなしがい
第213号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499
郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円）共

いい本があります。福田和也『悪の対話術』(200
 ○講談社現代新書「51」)です。現実において生身の
 の人間同士がどんな対話をするべきかという奥深い
 問題を取りあげています。書きだしはこうです。

「本書では、ある程度世間を知り、そのうえで成
 熟を志し、さらなる洗練を求める人のための、対話
 会話、議論の方法論を書いていきたいと思えます。」
 章立ては次のとおりです。

○対話とその悪 ○お世辞について ○悪口につ
 いて ○虚偽と韜晦 ○礼儀と挨拶 ○敬語につい
 て ○社交と立場 ○紹介と自己 ○多弁と無言
 ○観察と刺激 ○焦りと緊張 ○話題について

これは話し方のハウツー本ではありません。本来
 の意味のエッセイです。著者のフランス文学の素養
 が生きています。モラリストと呼ばれるフランスの
 モンテーニュやパスカルの本を思わせます。どの章
 の話題もモラリストの語るべきテーマです。日常の
 問題が日常のコトバで哲学的に考えられています。

著者は対話の基本をこう書きます。

「でも会話というものをいかに巧く(つまりは目

なっていく」と考えられます。しかし、必ずしも科
 学技術の発展や交通機関や情報網の整備は、社会や
 人間の進歩とは一致しません。

「人生の多様さや生活の豊かさといった観点から
 みれば、それは退歩であったり、喪失であるかも知
 れません。」

人間だけでなく、文学、音楽、自動車、家電製品
 なども、「新しければ新しいほどよいものだ」と思
 われています。ここから若者たちの人生への「焦り」
 も導きだされるのです。やたらと受験したり、資格
 を取るうとしたり、ろくに努力もせずにより早く自分
 の才能にあきらめをつけたりします。

人生にあせるのは若者ばかりではありません。年
 をとることを恐れる人たちも少なくありません。

「しかし、過度に若さを尊重し、年を経ることを
 軽視する価値観は、生きていくことを、極めて味気
 ないものにしてしまします。若さを失うことが、成
 熟の獲得ではなく単なる衰退であるとしたら、生き
 ていくことは何と空しいものでしょうか。」
 では、どのように生きたいのか。

的を実現させるにあたって有効に)展開するかとい
 うことを考えた場合、言葉の使い方よりも、会話の
 相手や場面、文脈、状況などを判断して、そのあり
 様に応じて言葉をなげかける、そのための認識と分
 析の方が大事な場合が多いのです。」

著者の語り口がいかにも軽快なので、うっかりす
 ると軽薄な文章と取られるかも知れません。しかし、
 その論理の展開をよくみれば、人と人との問題を深
 く探っていることがわかります。

●若い人たちの人生への「焦り」

対話論の根底には著者の人生観と哲学があります。
 もっともおもしろかったのは、「焦りと緊張」の章
 に書かれた若者論です。

「若い人たちが「焦」ってしまうのは無理もない
 ところがあります。というのも、現代は若さや速さ
 が過度に尊重されているからです。」

著者は近代社会の性格によって「若者尊重」の風
 潮を説明します。近代社会では、「社会が、世界が
 そして人間性自体が日に日に改善されていく、よく

「あまりにも性急に人生の成果を求める姿勢と、
 すぐに人生を断念してしまうことは、いずれにしろ
 自分の人生に、きちんと対面していない、取り組ん
 でいないという点では共通しています。」

著者の結論は単純です。

「対話も人生も(過程)が楽しい」

著者は移動のときの自動車と飛行機とのちがいを
 人生にたとえています。ある場所へ行くとき、自分
 で運転する車と飛行機ではどちらがうでしょうか。
 どちらも目的地に向かう点は同じです。ただし自動
 車では目的地への意識とともに、その時どきの運転
 や道路の状態も意識されます。それに対して、飛行
 機では、目的地に着くことばかりが重要で、ほかは
 「つけたし」です。何もできずに無力なまま待つば
 かりなので焦りも出てくるというのです。

この本は単なる対話の技術を伝える本ではありません。
 せん。人生観と結びついた哲学に支えられています。
 そして、著者は結果としての本を目的とするばかり
 でなく、本を書く過程も楽しんでいきます。それが読
 者にも考える楽しさを味わわせてくれます。

2004. 5. 1

月刊通信

はなしがい

第214号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円）共

そろそろそ日本語ブームも下火かと思われる一方で英語教育のブームが起っています。各地の学校で幼児期からの英語教育を取り入れたという報道も目にします。親の希望とすれば、幼児期から英語の能力をつけさせて二カ国語の使えるバイリンガルにしたいのでしょう。中学、高校、大学と十年近く英語を学んだにもかかわらず話せないことが悔いとなって、せめて自分の子どもには英語で自由に話す力をつけさせたいのかもしれない。

わたし自身は英語の会話はしたことがありませんし、英文は辞書を引きつつどうにか読める程度です。中学、高校のころには英語で外国人と話しができたらしいなあという願望はありましたが、学んだのはもっぱら試験問題を解くための英語でした。ところが、大学に入ってレポートや試験の答案を書くうちに、自分の日本語のコトバの能力を疑うようになりました。そして、日本語でさえもごときを厳密に考えられないのだから、とても英語を使えるようにはなれないだろうと思いました。そんなわけで、その後にはもっぱら日本語の勉強をするようになりました。

その目標は、コトバの使い方を気にせずにものごときを考えたとき、文章を書く力をつけることでした。日本コトバの会に入会したのもそのためでした。

わたしは今では英語の学習については二段階で考えています。第一段階は、簡単なコミュニケーションのできる能力、つまり日常会話の能力です。第二段階は、それに加えてものごとを考えたとき書いたりするまでの能力です。わたしは後者はあきらめましたが、前者の能力は必要があれば身につけたいと思っています。インターネットでメールを始めたとき、何通か英文のメールが来たので、一時、英文メールの書き方を独習しましたが、間もなく必要がなくなつたのでやめました。もしも、半年とか一年、英語を使つて生活するようなことになれば、また何らかの方法で学ぶつもりです。

●「バイリンガル」と「セミリンガル」

わたしは幼児期からの英語教育については疑問があります。母語である日本語の能力をつけなければ、言語による思考能力はつかないと思うのです。日ご

る自分自身が日本語の能力不足を感じていますし、能力不足の人も多く見かけます。「英語を学ぶとものごとを考える視野が広がる」と言われますが、それも母語としての日本語の能力があつてのことです。わたしはいま流行の日本語の教育の指導について、本当にコトバの能力が高まるのかどうか疑問があるので、なおさら英語教育のブームが心配です。母語さえしつかり定着していないのに英語を教えたら、日本語も英語も中途半端になるような気がします。市川力『英語を子どもに教えるな』(2004.2.10中公新書ラクレ)は、日本語教育の大切さを書いた本です。著者は1969年から2003年までアメリカで、現地の日本人子女の学習塾で指導をしていました。その経験から、子どもに幼児期から英語を習わせる親たちを批判しています。バイリンガルに育てたいという望みはそうかんたんには実現できないのです。それはきびしい道です。「話しことば」だけでなく、「書きことば」でも優れた能力を発揮できるのが本物のバイリンガルです。

そのためには、「動機づけ」「適切な環境」「適

切な方法」の三つが十分に整わなければ不可能だとい

います。著者が見てきた多くの在外子女たちには、バイリンガルどころか「セミリンガル」となる例が多かったそうです。セミリンガルというのは「母語も第二言語も」「日常会話言語」「レベルに止まり、「教科書理解言語」の運用に問題がある状態」をいいます。つまり、日常のコトバでおしゃべりができるほどのレベルにとどまって、文章に書かれたコトバを理解して読んだり書いたりできない状態です。母語だけで教育されても「教科書理解言語」の能力がつかなければ「セミリンガル」にもなりません。

問題は、子どもたちがしつかりと「話し・聞き」「読み・書き」のコトバの能力を身につけることです。極論すれば、日本語でも英語でも、どちらでもかまわないのです。アメリカで育った日本人の子どもたちには、英語をべらべらと話せるようになってから、ある年齢で「カベ」があらわれます。それは母語の学習段階においても子どもが乗り越えねばならないもので、言語学者・岡本夏木のいう「一次のことば」と「二次のことば」との間にあります。

つまり、日常の目に見える直接の面で使われる具体的なコトバと、実際の場面をはなれて間接にものごとを考える抽象的なコトバとのちがいです。日常のおしゃべりなら「一次のことば」で間に合いますが、自分の考えをまとめたり書いたりするには「二次のことば」が必要です。バイリンガルとなるには、二つの言語において「二次のことば」が習得されていなければなりません。ところが、幼児期から英語を習わせたがために、母語の獲得さえ危うくなる子どももいるのです。まさに「二兎を追う者は一兎をも得ず」のことわざどおりです。

● 「英語力」以前の何か

著者は幼児期からの英語教育の必要条件を次のようにいいます。

「日常会話レベルを超えて英語を使いこなすようになるためには、ある時期に一定期間英語漬けになつて相当の訓練をしなければならない。と同時に、言語の違いに関係なく、論理的に物事をとらえる力、相手にわかるようにきちんと説明する能力、そして

説明に値する内容のすべてを備えていなければ、高度な語学力は身につかない。英語を使って読み、書き、聞き、話せるようになるためには、単に子どもの時から始めれば済むわけではなく、英語自体の訓練以上に、思考力を高めることと伝えたい内容を持つことが大切である」

著者がまずあげた「論理的に物事をとらえる力」をつける教育は日本の学校ではどれだけ行われているでしょうか。残念ながら、コトバと論理の教育を担当するべき国語科でも重視されていません。そもそもコトバと論理の本質的な意義がとらえられていないのです。コトバによる論理の基礎訓練は小学生でも可能なのですが、まったく個々の教員まかせです。さらに著者は次のようにいいます。

「日本人が英語を使える大人になるために子ども時代から育んでいかなければならないことは「英語力」以前の何かにあるのではないか」

わたしが考える「「英語力」以前の何か」とは、日本語によるコトバ能力の総合であり、とくに「言語論理教育」とよばれる教育体系のことです。

最近、わたしは自分に本をよむ力がついた気がします。以前から、どうしたら本がよく読めるか、どうしたら内容をよく理解できるか、どうしたら深く読めるかということに関心がありました。世間には「読書法」の本はたくさん出ていますので、そんな本も手にすることがありました。

ところが、読んでみて分かったのは、わたしの関心は本のよみ方というよりも、コトバのよみ方だったのです。そもそも、わたしたちが毎日、いろいろな人たちと交わしている会話もいわば声になった文章です。本ばかりではなく、新聞や雑誌にも文章が書かれています。そのなかでとくに大量の文章を収めてあるものが本なのです。

近年ますます、若者たちの読書はなれが問題になっていますが、もしかして、本を読まなくなっているのではなく、本が読めなくなっているのではないのでしょうか。だとしたら、いくら本を押しつけても読めるわけがありません。文章のよみ方について、どのような教育がされてきたのでしょうか。

●読書の方法

外山滋比古『読書の方法（未知）を読む』（1981）講談社現代新書633）は、次のような問題を提起しています。

「学校では文字を教え、文章を読ませて、読めるの、読めないの、と言っているが、本当に読めているのだろうか。」

「平明さの信仰が広まるにつれて、国語教育は支柱を失うことになった。苦勞して読み方を教えなくとも、走り読みをすればわかる文章が多くなってきた。文章が読者の方へ歩み寄ってくれる。読者は安心して怠惰でありうる。」

外山氏は、スポーツを見たあとで新聞記事を読むような「わかっていることの読み」と「未知をよむ読み」とを区別して、前者を「アルファ読み」、後者を「ベータ読み」といって、後者の教育の大切さを述べます。そして、音読、素読、「耳で読む」読みなど、いろいろな手がかりを示しています。しかし、結局、こうやって読んだらいいという方法は示されません。外山氏の本ばかりでなく、ほかの「読

2004. 6. 1

月刊通信

はなしがい

第215号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて



コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

書論」でも、本の読み方は書かれても、文章そのものの読みかたについては書かれていません。

じつは文章を正確に理解するということは、一見やさしいことのようにですが、そうかんたんではありません。わたし自身、学校教育で文章の読み方を学びましたが、情報や知識を得たり、ものごとについて考えたりする読みではありませんでした。あらかじめ問題が用意されていて、それに答えるための読みかたでした。いわば試験のための読み方なのです。本の読み方の本は多いのですが、文章の読み方の本は少ないものです。わたしがおもしろいと思ったのは、大学受験の予備校で行われる現代文の講義です。講義の記録が『〇〇先生の現代文解釈実況中継』などというタイトルで本になっています。講師が問題文をていねいにたどって内容を解説するようすがよくわかります。残念なのは、これが試験問題を解くための読み方だということです。これをもう少し広く一般の人たちの文章の読み方に応用できると、おもしろいと思っています。

●印しをつけるよみ方

わたしの読み方は「印つけよみ」という方法です。日本コトバの会の大久保忠利の提唱したものを参考に、三十年近く実践と工夫を重ねてきました。印しをつけて文の構造をとらえる方法です。最近、この方法を使えば、だれでも文章が正確に理解できるという確信を持つようになりました。文章を読みとるひとつの技術として本にまとめるつもりです。

印しつけを付けることには二つの意義があります。第一は、文章の内容を目に見える文のかたちととらえられることです。文の意味と文のかたちとは切りはなすことができません。意味が変わればかたちが変わるし、かたちが変われば意味も変わります。たいていの人は文章のながれをサツと見て内容をつかみます。そこに飛躍が生じる危険があります。文のかたちを忘れて内容を想像しがちです。

第二に、読みにくい文章について、なぜ読みにくいのか、文のかたちで証明できます。読みにくい文章に出会うと、自分の理解力が不足しているのか、文章に問題があるのか迷うことがあります。そんな

ときにも、文章のかたちが見えるので、自分の読み方がわるいのか、文章がわるいのか判断できます。

●印つけの方法

わたしの読みの工夫は、文章にマル、セン、シカク、山カッコなどの印しをつけることです。あとで消してつけ直すことがあるので、必ず柔らかい2Bのエンピツを使っています。

いくつか基本的な印しをご紹介します。

①主語にマル、述語にセン——理論文では一文がやたらと長くなりがちです。そのときには、「ナニガ、ダレガ」にあたる語句をマルで囲み、「ドウダ、ナニダ、ドウスル」にあたる語句にセンを引きます。先にマルとセンをつけて、主部と述部の構造をつかんだあとで、文の意味を考えのけます。

②まとまった語句を山カッコで囲む——どんな文でも骨組みは単純なものです。ところが、いろいろな修飾語をつけてしまうので、文が長くなって骨組みが見えなくなります。しかし、文の要素ごとに山カッコでくくってやると、かたちが見えます。手が

かりになるのは、助詞の「を、に、と、へ、で、より、から」などでまとめられる語句です。かなり複雑な文でも、「へへ」はへへにへへを……する」といった単純なかたちになります。

③接続語と指示語はシカクで囲む——文の基本単位は「主文素(ナニガ)＋述文素(ドウダ)」です。この基本単位の結びつきを知る手がかりが接続の語句です。文の内部でつなぐのが「……だが」「……ので」などの接続助詞、文の外側でつなぐのが「しかし」「だから」などの接続詞です。ほかに「……(する)ため」「……ならば」なども接続の役目をしていきます。それらをシカクで囲みます。また、「これ、それ、この、その」などのいわゆる「指示語」もシカクで囲みます。それによって、指示語がどの語句の代理なのか注意が向くようになります。

以上、たった三つの印しですが、これをつけるだけで、文のかたちが見えてきます。ゲームをするようなつもりで楽しく文章が読めます。みなさんも、本、新聞、雑誌など、どんな文章を読むときにも実行してみてください。

2004. 7. 1

月刊通信

はなしがい

第216号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

六月二十七日の日曜日に、福島英さんの主宰するブレスヴォイストレーニング研究所の講演会に行ってきました。ホームページに公開されている発言を読んで、声についての考え方にひかれたからです。わたしはヴォイストレーニングに関心はありましたが、ただ単に肉体的な能力を高めるものだと思っ
ていました。ところが、福島さんは物理的なトレーニングばかりでなく、コトバや声の表現を重視しています。わたしの研究する表現よみの考えにも通じます。表現よみとは、文学作品のうち小説を声に表現してよむことです。もしかしたら、歌もよみも原理は同じかもしれないと思いました。

●ブレスヴォイストレーニング

会場は一戸建ての家の地下スタジオです。壁一面が真っ黒で定員二十名くらいの広さです。席に着くと前方の二つのスピーカーからジャズ風の音楽が流れていました。十二名の参加者は若い人ばかりで、わたしがいちばんの年長者でした。

最初に六曲のボーカル曲を大きな音で聞かされて、

感想を書きました。わたしは何を意図してのことか分からないままコトバの表現について感じたことを書きました。それから登場した福島さんはメガネをかけた長身の人で、よく響く低音でおだやかに話しました。

まず、各自が事前に提出した質問用紙を見ながら、一人ずつ順に対話を始めました。個人の質問についてのコメントなのですが、福島さんの声とトレーニングについての考えかたがよく分かりました。これで一時間半、そして休みなく後半は講演ですが、講演会というよりも面談かオリエンテーションのようでした。参加者の多くは入所してトレーニングを受けることが目的で、わたしのように入所して福島さんの話を講演として聞きに来た人はむしろ少数でした。

●日本の歌と欧米の歌

福島さんは三時間を越えて話しました。すばらしい歌手の歌を聴かせて息づかいの説明をしたり、自分で声を出してみせたりします。まるで解説つき
のコンサートのようでした。わたしは感動しました。

福島さんの考えるヴォーカルの理想は、声による感動的な表現ですから、現在の歌についてもきびしい批評が向けられます。基本となる考えは、日本の歌と欧米の歌との対立です。そこから、日本語と欧米語のちがいが、高低アクセントと強弱アクセントのちがいが、音と声とのちがいが考えられます。それもまた日本の文化や教育についての批評になります。福島さんはボーカリストだったようですが、い歌とは何かと考えて、声の表現のさまざまな分野へと研究が広がったようです。

近ごろのわたしの関心とつながる点が二つありました。一つは、日本の歌と欧米の歌との比較です。日本の歌は「ことば」と「メロデー」に特徴があります。それに対して、欧米の歌は「音色」と「リズム」です。このちがいは朗読と表現よみにも通じます。朗読は、ことばを声の高低で伝えようとし、日本語のアクセントは高低だとされる一般的な考えにしたがうからです。だから、音色やリズムには欠けています。

しかし、日本語にも強弱のアクセントがあります。

たとえば、文末の「——ない」「——ある」「——いる」の「な、あ、い」には、つばきを飲み込むときのようなノドの力が加わります。この音を高く軽くしたら表現になりません。

もう一つは、福島さんがいう「ことば（発音）」のつまらなさも、いわばコトバの字づらです。「私は悲しい」という文をよむとき、発音ばかりに気を取られると、文字づらの情報を伝えるにとどまりません。「ワタシハ カナシイ」というロボットのような発音でも文字に置き換えて伝えられますがそれは表現とはいえません。どのような意味や心情が声に表現されるかということが問題なのです。

「日本の教育でよくないのは、最初に答えが決まっています、それを同じ順番で一人の先生から覚えていく方法しか取られないことです。」

「外国人の場合は、二十歳くらいまでに日常的に良いヴォイストレーニングをしてきているといえます。これは、必ずしもヴォイストレーニングという名でやっているわけではありません。例えば、外国人は二十歳にもなったら、即座に自分の考えを音声で表現できます。言葉で自分の考えを言語表現力こそ、動物と異なる人間の証だからです。だから考えたことをすぐ音声にできます。これをスピーチ、ディスカッション、ディベートで学んできています。日本だと、この分野のプロでなくては、なかなか人前でうまく話せないでしょう。」

「外国人は、自分の思うことを自分のコトバで発せられなかったら、無視されるどころか、敵意をもたれます。表現されないものは、存在しないのです。（引用者＝中略）音声というものでしっかりと発し、受けなくては、人と人とがコミュニケーションをとれない社会だからです。そういうことで言うと、音

への感覚の厳しさがちがいます。相手のコトバのたった一言が聞き取れなくとも Parlor と聞き返すのは、それだけことばに責任をもつからでしょう。リズムも音感も同じです。」

「ここでは（引用者＝研究所では）日本人の声の感覚を一時、切るためにアクセント（高低）や発音はやりません。歌の世界に高低アクセントは必要ないので。まず、感覚を日本語の高低アクセントから、欧米語の強弱アクセントに切りかえていくことを優先します。」

福島さんのトレーニングの特徴をひとことと言うなら、深い息で歌うということです。深い息こそ、声とコトバの基礎です。声の表現とは、美しくなめらかな声を出すことではありません。声とことばがその人の精神と結びつくことです。声の表現能力はヴォーカリストを指す人だけでなく、すべての人が持つべきものです。自らの精神と結びついた声とことばは生き生きしています。わたしは、日本人の一人ひとりがそんな声を身につけていけば、日本の文化の質も変わるだろうと思っています。

2004. 8. 1

月刊通信

はなしがい

第217号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

大学時代に哲学サークルで勉強をしていたとき、ある女子学生が「本をきちんと読む力をつけたい」と発言したことがあります。近ごろよくそのことを思いだします。当時のわたしは知識に飢えていました。とにかく、たくさん本を読んでいろいろなことを知りたかったのです。いっぺんにまとまった知識が得られる方法はないかと考えて哲学を発見しました。

しかし、哲学サークルで勉強を始めてから、哲学は知識として身につけるものではないと気づきました。だから、女子学生のことばが印象に残ったのでしょう。それでも、がむしやらに知識を得ようとする読書は長いこと続きました。そして、その後も「本をきちんと読む力」とはどういうものか考えることはありませんでした。

ところが、ここ数年、正確には五、六年ですが、文学作品を声に出してよむ活動をするようになってから、本のおよみ方が明らかに変わりました。本をきちんと読もうとする気になっていきます。そして、そのための基本技術をまとめてみようと思っています。

というわけで、今回は、その要点をお知らせいたします。

●本のよみ方——二つの方法

わたしの本のよみ方には二つの柱があります。一つは、印しをつけること、もう一つは、声に表現することです。一つめは、わたしがこれまで言いつづけてきたことですが、この二つを結びつけることがミソです。印しをつけるために文章をよみ、声にするために印しをつけるのです。印しをつける手がかかりは声です。声によって決定される文の意味を印しに定着させます。そして、印しにしたがって声に表現して文の意味を確認するのです。

これは、楽譜を読みとって歌を歌うことに似ています。楽譜は歌うために読むものです。そして、歌ってみることで読めたかどうか確かめられます。歌うために読まない楽譜はきちんと読めないのです。

●印しつけよみと声の表現

印しつけよみの方法をしばると四つです。印しをつけ

るときには、必ず小声を出してよむか、アタマに声を浮かべてよみます。

①主部にマル、述部にセン——一文ごとに主部(ダレガ・ナニガ)はマルで囲み、述部(ドウスル・ドウダ)にはセンを引きます。主部にマルをつけると、主部の変化とともに話題が変化することがはっきりします。また、文の意味が文末で決まるということもセンをつけて確認できます。

②トキ・トコロにシカク——できごとには、トキ(時間)とトコロ(場所)が必要です。「何かが起こった」「だれかが何かをした」というとき、まず、イツ、ドコデと考えるでしょう。この二つは5W1H(ダレガ・イツ・ドコデ・ドンナ・ナニヲ・ドウ・ドウスル・ナゼ)のなかで欠かすことのできない要素です。

③ツナギと指示語にはシカク——あなたも国語の試験で、シカクに接続語をあてはめたり、「これ」「それ」の指す語句を考えたりしたでしょう。どちらも文章の展開をつかむために重要なことです。「しかし」「また」「そして」などの接続詞に限らず、「なぜなら」「たとえば」「ために」などの論理を

示す語句も含まれます。指示語があったら必ずシカクで囲んで、どの語句の代理なのか確かめます。

④まとまった語句は山カギでくくる——長い文が多いと文章がよみにくくなります。しかし、どんな長い文でも基本の私たちは単純です。主部と述部を基本として、「……を、……に、……と、……へ、……で、……より、……から」などの要素が加わります。「○○が……するコト」「○○が……するモノ」などと名詞でまとめられる部分は「<」でくくります。すると、「○○が……を……する」といった文の単純な構造が見えるのです。

印しつけの正しさは、声に出してよんで確認できます。印しをつけたことばは三種類の声で表現されます。①の主部と述部が基本となるふつうの声、②が上がつたイントネーションの声、③がプロミネンスの声です。

文は大きく主部と述部に二つに分かれ、さらに文の要素ごとに細かく区切られます。主部と述部は基本の声でよんで、文末にある述部の方がいくらか強くなります。そのほかの要素は述部よりも高いイン

トネーションでよみます。また、修飾語と被修飾語との関係では、修飾することばは高いイントネーションでよみ、修飾されることばは基本の声でよみます。「私はときどき学校へ行った。」という文を例にしましょう。「私は」とよんですぐに述部の「行った」が来ればそのままの高さですが、「ときどき」と副詞が来たらイントネーションは高くなります。

「学校へ」も述部ではないので、イントネーションは高いままです。高いイントネーションは「これはどこかへつながるぞ」というよみ手の意識の表現です。そして、「行った」という述部が来たときに、基本の声にもどって文をよみ終わります。

文中の文はいつでも前の文の内容を受けますから、つながりを強調するために、関係ある語句が強められます。これを、文脈のプロミネンスといいます。また、原則としてプロミネンスになる語句もあります。接続語と副詞です。「しかし」「また」「だから」などの接続語、「ゆっくり」「たびたび」「かなり」などの副詞も強調してよまれます。

●文章は声で生きかえる

以上が、印つけと声でよむ本のよみ方です。印しと声の表現とは相互に関連しています。印しをつけるのも、声に表現するのも、本の理解が目的です。手作業による印しつけも、発声による表現も、心理的な理解と結びついています。印しもつけず声も出さずによんだら、意識が内容に集中しません。その反対に、理解がすすむときには、印しをつけることがよく見えるし、イントネーションやプロミネンスも自然に表現されるものです。

だれでも自分で話すときには、ことばを正確に区切って、的確な声の調子をつけられます。しかし、文章には、ことばの区切りや声の調子は書きこめません。ですから、人の話を聞くよりも、書かれた文章を理解するほうがはるかに骨が折れます。それでも、印しをつけて、声に表現してみれば、手ぶらで黙読するよりもずっと理解しやすくなります。文章が声になって生きかえるからです。相手の声を想像することは、まさに相手の身になって考えることなのです。

2004. 9. 1

月刊通信

はなしがい

第218号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

この十月からNPO日本朗読文化協会で朗読教室の講師をつとめることになりました。「源氏物語」の現代語訳で知られる作家の瀬戸内寂聴さんを名譽会長にして二〇〇一年十二月に設立された協会です。

●文化としての朗読

朗読文化協会の基本理念は次のようなものです。「私たちは遠い昔から「読」を声にして楽しむことにより生活に潤いを与え、コミュニケーション能力を習得してきました。かつては日本の学校や家庭でも絵本や教科書を読み聞かせ、目と耳で同時に感じ、そして考えることが当たり前でした。声を出して読むこと——これが音読です。そしてさらに人間の複雑な感情表現を付加して、そこにドラマティックな世界を創ること——それが「朗読」です。朗読は自然に人間関係を円滑にさせる基本訓練になっていたのです。

NPO日本朗読文化協会は、「人間の声による朗読」を文化・文芸活動として復権させ、一般参加型の文化事業に育て、社会に認知させ、普及させるた

めの活動を行っています。既存の枠にとらわれず自由な発想のもとに、教育・人材育成、エンターテインメント、朗読ライブラリーなどのさまざまなプロジェクトを立ち上げ、多岐にわたる朗読活動を支援し、朗読の活性化と振興、地域社会や福祉への貢献を推進することを目的としています。」

あいまいに使われている「朗読」を「音読」と区別して、「人間の複雑な感情表現を付加して、そこにドラマティックな世界を創ること」とする定義は、わたしの研究する表現よみと重なります。また、「朗読」を「文化・文芸活動として復権させ、一般参加型の文化事業に育て、社会に認知させ、普及させる」という趣旨にも賛同できます。文化が力をもつためには、さまざまなメディアや物質的なたちを持つ必要があるからです。

朗読文化協会では今後二年間の事業計画をいろいろとあげています。その中で、私が注目するのは中学生高校生を対象とする朗読などの文化活動の支援です。その内容は次のようなものです。

「若い世代に向けて、朗読の普及を行うために、朗

読、演劇部の部活支援を行います。文化祭での発表指導や定期的な学校訪問公演、朗読大賞の中高生部門を設立し、「朗読甲子園」の参加も促進させます。さらに、演劇や合唱と朗読を組み合わせた新しい形式の朗読ドラマなども指導し、若い世代の朗読ファンを創造していきます。」

これが実行されれば、かつて学校教育で提唱されたものの立ち消えになった朗読が若者の世界に生きかえり、今後の朗読文化を発展させることでしよう。

●学校にはない「音読」と「朗読」

学校教育では、以前に一度、音読・朗読が重視されたことがあります。平成十年(1998)に出された現行の「新指導要領」では音読・朗読の指導は消え去っています。ところが皮肉なことに、斎藤孝著『声に出して読みたい日本語』(2002)によって、今では、声に出して本を読むことの肉体的・精神的な有効性が社会的に認められるようになっていきます。

現行の「新指導要領」の特徴は、完全週休五日制を基本とした「ゆとり」と「生きる力」の養成です。

よばれて学年ごとの設定があります。

小学校——第一学年「話や文としてのまとまりを考えながら音読すること。」、第二学年「文章の内容を考えながら音読すること。」、第三学年「文章の内容が表されるように工夫して音読すること。」、第四学年「事柄の意味、場面の様子、人物の気持ちの変化などが、聞き手にもよく伝わるように音読すること。」、第五学年「聞き手にも内容が分かるように朗読すること。」、第六学年「聞き手にも内容がよく味わえるように朗読すること。」

中学校——第一学年「文章の内容や特徴がよく分かるように朗読すること。」、第二学年「文章の内容や特徴に応じた読み方を工夫して朗読すること。」、第三学年「文章の内容や特徴を生かして効果的に朗読すること。」

以上の項目を見れば、朗読教育をどのような方向にすすめればよいのか分かります。このような指導で小学校から中学校まで教育されたら、きっとすばらしい読み手が育つたことでしょう。ところが、前に書いたように九年後の指導要領において「音読」

教育内容の厳選、総合的な学習の時間の設定、成績の評価法の変化などがありました。その後、平成十五年(2003)に原則をいくらか修正したものの根本は変わりません。

朗読教育は声のコトバの能力を高めて「生きる力」を育てます。それなのに指導要領の小学校国語に「朗読」の文字はありません。五、六年生に「か所」「易しい文語調の文章を音読し、文語の調子に親しむこと。」とあるだけです。中学校では、二年生の「古典」で「なお、指導に当たっては、音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わうことができようにし」と、読みについて「目的や必要に応じて音読や朗読をすること。」と二つあるだけです。

●十五年前の学校の朗読教育

学校教育で音読や朗読が重視されたのは、今の指導要領の一つ前、平成元年(1989)の学習指導要領でした。小学校から中学校まで一貫した音読・朗読の教育方針が設定されています。小学校一―四年は「音読」、小学校五、六年と中学校では「朗読」と

「朗読」ということばはいっせいに姿を消しました。

朗読というのは、ただ大きな声を出して本を読むことではありません。それは「音読」です。文章には文字とともに意味が含まれています。本を読むことは、ただ文字が声になるだけのことではなく、よみ手自身がその意味を読み取って、よみ手自身の表現として声に出すものです。ですから、声に出して読むことによって、そもそも、本を読むとはどういうことか、どのように読んだらいいのかという根本が問われることになるのです。

朗読文化協会は文化としての朗読の理想を「人間の声による朗読」とよんでいます。これまでの学校教育で行われたような斉朗読は「朗読」ではなく「音読」というものでしょう。それぞれのよみがひとりの人間の表現として評価される朗読こそ、文化としての朗読といえます。

学校教育から「朗読」の教育が消えて久しいのですが、「文化としての朗読」が社会に広まれば、また学校でも朗読の教育がさかんになり、新たな声の表現のブームが起るかもしれません。

2004. 10. 1

月刊通信

はなしがい

第219号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

ベトナム戦争当時、本多勝一著『殺される側の論理』(1983朝日文庫)という本が出版されました。加害者であるアメリカ国家の側ではなく、被害者であるベトナム民衆の側からベトナム戦争を考えた本です。当時、わたしはベトナムで作られた映画を見たり、ルポルタージュを読んだりして、戦争で苦しめられたベトナム民衆の生活を知ろうとしました。しかし、アメリカの兵隊たちの生活には関心を持ちませんでした。兵隊というのは、戦場で人を殺す訓練を受けた機械のように感じられて、人間とは思えなかったからです。そんな人たちのことをわざわざ知ろうとは思いませんでした。

ところが、最近、デーヴ・グロスマン著(安原和見訳)『戦争における「人殺し」の心理学』(2004ちくま学芸文庫)という本を読んで考えなおしました。たとえ殺人の訓練を受けた兵隊であっても、人間は信頼できると思えるようになりました。そして、近ごろ頻繁に起こる殺人事件についても、加害者の心境はどういうものかと関心がわきました。

そもそも殺人が好きだというような人間はほとん

どいらないとわたしは思っています。いるとしても、それは特殊な人間だと思っています。何十人も人を殺すような大量殺人事件の犯人は、世界人口六十億人から見れば、ほんの少数です。それでも、なぜ人が人を殺すのか、そのときどんな心理が働いているのか、その点については気になります。

テレビでは毎日「〇〇殺人事件」といったドラマが放映されていますし、小説でも同様のタイトルの本が売れています。人々はまるでゲームを見るかのように殺人を見ているのですが、殺人にかかわる人間の真実を深く考えようとは思いません。そういう私も、殺人者の心境に関心は持つものの、この本を読むまで考える手がかりがありませんでした。

●人は人を殺したくない

今回の本でわたしがまず感心したのは、兵士が戦場で人に向かって発砲する率の低さです。そのいくつかの例が挙げられています。

一つは、アメリカの南北戦争です。一八六一年から五年間にわたって行われました。ある戦いのあと

で、戦場から約二万七千挺の銃が回収されたのですが、その九〇パーセント近い二万四千挺の銃は弾が装てんされたままで発砲されていませんでした。その半分の一万二千挺には複数の弾が詰められ、さらにその半分の六千挺には三発から十発、中には二十三発も詰まった銃があったそうです。

これは何を意味するのでしょうか。当時使われたマスケット銃は先ごめ式で、一発ずつ先から銃弾を詰めるものでした。つまり、戦闘の最中に多くの兵士がやったことは、懸命に銃に弾を詰めることで、実際に発砲する兵士はごく少数だったのです。

第二次大戦中の例も挙げられています。アメリカ陸軍の准将マーシャルが兵士たちに尋ねると、戦闘のとき、千人の兵士のうち平均して十五人から二十人しか「自分の武器を使っていなかった」と言いました。しかも、その割合は「戦闘が一日中続こうが、二日三日と続こうが」つねに一定だったそうです。戦闘で発砲する兵士の割合は、のちの朝鮮戦争でも、ベトナム戦争でも変わりはありませんでした。だから軍隊ではいかにして人が人を殺せるようにす

るかが教育の課題なのです。

●命の教育と兵士の行動

近ごろ、子どもたちがかわる殺人事件が目立ちます。被害者になるばかりではなく、加害者になることもあります。そこで「命の教育」というものがあるいろいろな方法で行われています。小さな動物を飼育したり、その死に立ち合わせたり、死について考えさせたりしています。しかし、わたしにはどうもことばで道徳を教えこんでいるように見えます。子どもたちの日常の行動を基礎に人間関係を見つめ、その延長上で生と死が考えられるべきだと思っす。そこで問われるのは、そもそも人間とは何か、人と人との関係は何かという根本問題です。

この点についても、この本から学ぶものがあります。「戦場の人間心理が誤解されてきた根本原因をあげるとすれば、ひとつには戦場のストレスに闘争・逃避モデルを誤って当てはめたせいだ。」

つまり、兵士の行動を単純に「闘争」と「逃避」とに二分することが誤りだということです。ほかにも

「威嚇」と「降伏」があります。まずお互いに「威嚇」を行って、相手を「降伏」させようとしています。できる限りお互いに殺し合うことを避けるのです。動物でも同様で、動物学者コンラート・ローレンツはピラニアやガラガラ蛇が互いに戦わないことを指摘しています。人間を含めた多くの動物は、同種のあいだでは戦いを避けるのです。

昔の戦争では、お互いにおどし合うために、大声で叫んだり、笛やラッパや太鼓で大きな音を出したりしました。ほとんどの戦いは、どちらか一方がおびえて逃げ出して終わったそうです。銃を使う戦争でも、前に述べたように、お互いに発砲するのは少数の兵士でした。死んだ兵士は、銃撃戦ではなく、逃げ出すときに撃たれたものが多いそうです。兵士が「闘争」や「逃避」を迫られるのは、「威嚇」や「降伏」の道が閉ざされたときなのです。

●人と人との向かい合い

最近の戦争では兵士の死者はますます少なくなっています。それに反して、一般人の死者が多くなっ

ています。これはなぜでしょうか。兵士同士が直接に向き合うことが少なくなっているからです。そして、お互いに敵の姿を見ていないからです。

かつての戦争は、人と人が向かい合うものでした。しかし、大砲や飛行機やミサイルという装置によって、目には見えない敵を攻撃できるようになりました。敵が見えないから人を殺すことに恐怖を感じることもなく、攻撃ができるようになったのです。つい最近のイラク戦争でのアメリカ軍の攻撃や、それに抵抗する勢力のテロ攻撃、どちらもお互いが顔と顔を突き合わせてはいません。

私には戦争が現代の人間関係の拡大図のように見えます。そして、殺人事件は現代社会の象徴のようにです。人と人が面と向き合わないことからくる恐怖、そこでは「威嚇」も「降伏」も成り立ちません。「威嚇」はお互いの心をとらえ合っているから成り立つし、「降伏」はお互いに勝ち負けの共通理解があるから成り立つのです。

戦争や殺人からも、人間関係のありかたと子どもたちの教育への教訓は見えてきます。

2004. 11. 1

月刊通信

はなしがい

第220号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円）共

日本人が日本語を学ぶというブームが続いていきます。時どきのベストセラーの本には、必ず文章の書き方や話し方などに関するものが入っています。というのも、一般の人たちが基本的なコトバの能力の不足を感じているからでしょう。

「国語の力」というと、学校教育での基礎知識のような感じですが、「日本語の力」というと子どもからおとなまでに共通するコトバの能力が考えられます。これまでは、コトバの力の四つ——「話し・聞き、読み・書き」のうち、「書き」が重視されました。また、本を読むのも黙読が当たり前でした。どちらも文字のコトバへの関心です。

ところが、「朗読ブーム」によって声のコトバに焦点が当たるようになりました。声に出してよむことが、頭の働きをよくするというものでした。しかし、いつかコトバの能力づくりよりも、体力づくりや脳に刺激を与えることが目的になっていきます。

「音読練習帳」などという「便乗本」が続々登場しています。「音読」という呼び方にも朗読からの後退が表れています。

声のコトバにも文字のコトバと同じように意味があり、内容があります。ただ声を出すだけの訓練に止どめず、「読み・書き」の能力につなげたいものです。

●録音による声の訓練

声のコトバの訓練をするいい方法はないだろうかというのは、わたしの一貫する研究テーマです。以前から、教育におけるテープレコーダの利用をすすめてきました。わたしが小学生のころ、今から四〇年前には、テープレコーダーはオープンリール式の大きなもので持ち運びに不便でした。しかも、庶民には手の届かないほど高価でした。ところが、今では小型のカセットテープレコーダーが安く買えますし、手のひらに収まるボイスレコーダもあります。

声の録音はビジネスの世界ではよく利用されています。それなのに、教育の世界ではあまり使われていません。録音の機械が安くなって普及している現代なのですから、もっと使われて欲しいものです。

声のコトバの訓練と言っても、難しいことはありません。

ません。まず自分の声を録音して自分で聞いてみることです。自分の話し声や話しぶりをじっくり聞いた人は、ほとんどいけません。「人の振り見て我が振り直せ」ということわざがあります。他人の態度を見ることで、自分を振り返ることができるのです。それと同様に、まずは自分の声がどんな声で、どんな話し方をしているのか自覚することが出発点になります。録音すれば自分の声は、他人の声のように聞けます。自分の声を注意深くよく聞けば、気になるところや直すべきところがわかります。

わたしの師・大久保忠利は「教師は時には自分の授業を録音して聴くべきだ」と言っていました。これは教師ばかりでなく、教育される生徒にとっても必要なことです。とくに、朗読の指導に録音を取り入れたときに、その効果が大きくなります。文学作品を読むときの表現力は、日常の話しぶりと対応します。その人の朗読には、その人の話しぶりが現れますし、また逆に朗読の力が上がると、話しぶりもよくなります。自己成長は、己を知ることから始まります。まず録音で自分の声を聴いてみましょう。

●音声入力ソフトの応用

最近、わたしはもう一つ、音声表現の自己訓練のためのすばらしい道具を発見しました。パソコンで使う音声入力ソフトです。このソフトを使うためだけにパソコンを買う意義があると思えるほどです。

キーボードで文字を打ち込むかわりに、声で文章が書けるのです。マイクを通じて声で話す通りに自動的に漢字仮名混じりの文章にしてくれます。多少、認識や変換のまちがいはありますが、わたしの感じでは95%くらいまでの認識変換能力があります。

わたしは二年近く、ドラゴンスピーチ（今はVer. 7）やViaVoice（今はVer. 10）の二つのソフトを使ってきましたが、どちらも最新のバージョンで、かなり満足できる使い心地になりました。それで今回、朗読への応用を思いついたのです。

ソフトは完璧なものではありませんが、使い方に応じて学習するので能力があがります。使い始めに十五分ほどサンプルの文章を読みあげて自分の声を覚えさせます。また、使い手の文章の漢字仮名の

表記の癖なども覚えさせられますし、よく使うことばを発音して辞書に登録できます。日本語入力の辞書登録と同じ要領です。このような学習機能を利用することによって、使いこんで行くほど認識率と変換率が上がるのです。

音声入力ソフトによるコトバの訓練の効果はいろいろありますが、今は三つあげておきましょう。

第一は、日本語の発音の訓練です。ソフトによる声の認識は一つ一つの音ではなく、語句のまとまりについて行われます。それでも、一音一音をより正確に発音すると認識率が上がるのです。さらに、ソフトについてくるモニター用のヘッドホンをつけて行くと、自分の声が異様なほどよく聞えるので、正確な発音ができるようになります。

第二に、文の構造を意識する訓練です。人の文章を読んでも、自分で書いた文章を読んでも、語句の意味のまとまりが分かるように読むときと、そうでないときとは認識率が変わります。主部と述部の関係、修飾と被修飾との関係をつかんでよむとやはり認識率が高まります。

第三は、ことばを発しながら考える訓練です。人は文章を書くときにも頭の中でコトバの音を思い浮かべています。それを口から出せば口述筆記になるのです。考えをコトバに出すと、そのコトバに続いてさらに考えが進められます。これは話し方の訓練そのものです。

認識率はソフトの技術と自分の能力との兼ね合いで微妙に変化します。ソフトの技術と自分の能力とのバランスによってソフトも成長するし、自分の能力も伸びるのです。

わたしは音声入力ソフトを、文章の「読み」と「書き」を一体化させる道具として使っています。これを子どもたちの教育に応用することも考えられます。これまでの言語教育では、「話し」と「書き」とを結びつけることができませんでした。しかし、このソフトで話し声を文章にしてみれば、声と文字との関係が分かります。声のコトバが即座に文字のコトバに変わるので一目瞭然です。このソフトによって、コトバ教育の分野に新しい展望が開けるかもしれないと思っています。

2004. 12. 1

月刊通信

はなしがい

第221号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515

電話&FAX. 03-3445-6499

郵便振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp

Webページ <http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

頒価50円（1年1,500円共）

今さらながら、あらためて、現代は戦争と殺人の時代なのだと思えます。毎日、戦争で人が殺されているし、殺人事件も繰り返されています。

わたしはまだ、二一九号で紹介したデーヴ・グロスマン著（安原和見訳）『戦争における「人殺し」の心理学』（ちくま学芸文庫2004.5.10）を読み続けています。文庫本で五百ページ以上の厚い本です。三ヶ月かかってもまだ半分です。なかなか読み進められません。兵士たちの証言から「殺人」という重いテーマが心に迫ってくるのです。人が人を殺すやせなさで気が重くなります。それでも読まずにはいられないのです。

著者は、米国防軍に二十三年間勤めた陸軍中佐で、陸軍士官学校の教授もしています。本は八部四十一章の構成です。まったくの「殺人」づくめです。

「1殺人と抵抗感の存在、2殺人と戦闘の心的外傷、3殺人と物理的距離、4殺人の解剖学、5殺人と残虐行為、6殺人の反応段階、7ベトナムでの殺人、8アメリカでの殺人」

●戦場の兵士の心理

前回、紹介したのは第一部だけでした。今回、紹介したのは、「4殺人の解剖学」です。兵士が人を殺すときの要因から教育の課題が考えられます。

第一は、権威者の役割です。兵士が人を殺すのは権威者から命令されたときです。兵士ひとりのときには人を殺すことはなかなかできません。ですから、軍隊では、目ごろから権威者に服従するように、徹底的に兵士を訓練しているのです。

第二は、仲間という集団の圧力です。集団の中に埋もれてしまうと、個人責任を逃れて人を殺すことができます。無責任な群集心理として次の例があります。学校での「イジメ」にも当てはまる構造です。

「ある状況に傍観者が介入する確率は、その状況を目撃している人数が多いほど低下する。つまり、大群集の中で身の毛もよだつ犯罪が行われても、周囲の傍観者が介入する確率は極めて低いということである。しかし、傍観者がひとりしかいないことで、責任を分散する相手がまわりにいない状況では、介入する確率は非常に高くなる。」

教育の課題は、大群集の中においても一人で責任を担い得る人格の育成ということになります。

第三は、殺人を実行させる心理的な距離です。これがあることで人は殺人に踏み切れます。それは、①文化的距離、②倫理的距離、③社会的距離、④機械的（機械の介入）距離の四つです。

一つめの文化的距離とは、「今後出会うこととなる潜在的な敵について、劣った生命形態であると思ひ込ませることである。」

アメリカ兵はベトナム戦争のときには敵を「グック」と呼び、かつて、ドイツ兵を「クラウト」と呼び、日本人を「ニップ」と呼びました。旧日本軍の七三一部隊が中国人捕虜を「マルタ」と呼んだのも同じことです。

二つめの倫理的距離とは、自己および自己の大義を正当化することです。これには二つの要素があつて、第一は、敵を有罪だと決めつけること、第二は、自国の大義は正義であると主張することです。この心理が警察の暴力を可能にし、戦場の暴力を可能にしました。「敵は有罪なのだから懲罰または復讐が

必要だ」とか、「兵士を差し向けるのも無理はないほど凶悪な犯罪人ならば、相手を殺すことは正義の執行以外のなものでもない」というのが戦争遂行者の決まり文句です。

三つめの社会的距離とは、「敵」との戦いではなくて、軍隊における将校と下士官との階級的な差別化です。二つの立場の距離が大きいほど、将校は部下に命令して死の危険に追いやりやすいのです。

四つめの機械的距離とは、機械が介入することによる相手との距離です。人と人が向き合うとき、距離が近ければ近いほど、人は人を殺しにくいのです。ところが、石、ナイフ、銃、大砲、爆弾といった武器が介入することで、殺人は容易になります。最新の武器では夜間の戦闘で使われる「熱線映像装置」や「暗視装置」があります。殺される人間は単なる「緑のしみ」のような標的として殺されるのです。

●アメリカ社会の殺人教育

最後の「8アメリカでの殺人」には「アメリカは子供たちに何をしているか」という副題がついてい

ます。急増する暴力事件や殺人事件との関連で、子供たちの状況が描かれています。戦場における兵士の発砲率の高度化と無関係ではありません。

「第二次大戦では、個々の兵士の発砲率は十五から二十パーセントだった。それがベトナムでは、脱感作（感受性を軽減または除去すること）、条件づけ、そして訓練の体系的プロセスによって、ついに九十五パーセントもの高率を維持するまでになったのである。」

軍隊の訓練の方法には、心理学者のパブロフやスキナーの理論が応用されています。なかでも映画を使う古典的な条件づけは単純ですが効果的です。アメリカ政府は暗殺者の訓練にも使いました。

「暴力的に人々が殺されたり傷つけられたりするさまを描いた専用の映画が使われた。映画を通じて順応させることで、このような状況から自分の感情を切り離せるようになると考えられたのである。」

「一連の身の毛もよだつ映画を見せるのだが、その映像はしだいに恐怖の度合いを増してゆくようになっていく。被験者は、顔をそむけられないように

頭を締め金で固定され、特殊な装置を使って顔を閉じられないようにされていた」

そこから現在の映画と子供の教育へも目が向けられています。「子供たちが娯楽として観ている映像では、苦悶や暴力の描写がいよいよ生々しくなつてゆくのに、社会はそれを黙認している」

しかも困ったことに、子供たちの側でも、暴力や殺人への感受性を失わせる「仲間意識」がはたらくのです。「凄惨な場面に目をつぶったり視線をそらしたりすれば、強力な集団のプロセスによって軽蔑され、あなどられることになりやすい。暴力を目の当たりにしてもびくともしないというハリウッドの価値観を体現している者は、青年期の同輩たちのグループでは尊敬と称賛という報酬を得る。多くの観客は、心理的な締め金で頭を固定され、社会的な圧力によって眼を閉じることができなくなるのだ。」

軍隊での教育の目的は、いかにして人を殺せる人間をつくりあげるかです。この本にはそれがよく書かれています。同時に、いかにして人を殺さない人間を育てるかという教訓も読みとれるのです。